責任ある化学物質管理

花王は、世界の人々が化学物質の恩恵を享受し、そのリスクが適切に管理される安全・安心な社会であることが大切だと考えます。この社会の実現に向けて、ESG(環境・社会・ガバナンス)活動を通じて「責任ある化学物質管理」を推進し持続可能な社会の実現に貢献していきます。

社会的課題

化学物質は私たちの生活を育み、世界の人々の豊かな生活文化の実現に不可欠です。その反面、化学物質が人と環境に負の影響を与えてしまう側面もあります。

気候変動、生物多様性損失、汚染が地球の三重の脅威と称され(UNEP, 2021※1)、化学物質と廃棄物の不適切な管理が世界的な汚染危機を招いていることがG7各国の大臣レベルで認識されています(G7, 2022※2)。2020年以降の化学物質管理に関する国際目標(ポストSAICM※3)策定に向けた議論で交わされているように、関係する幅広いステークホルダーの参加と野心的かつ具体的な化学物質管理が求められています(UN, 2022※4)。

※1 国連環境総会
https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100153120.pdf
※2 G7 気候・エネルギー・環境大臣会合コミュニケ
https://www.env.go.jp/content/000039435.pdf
※3 SAICM
Strategic Approach to International Chemicals Management
※4 IP4.2 (2022)
http://www.saicm.org/Portals/12/documents/meetings/IP4/Statements/ICCM5%20President%20Opening%20Remarks.pdf

方針

花王は、責任ある化学物質管理をESG戦略における重点取り組みテーマのひとつとして位置づけています。

我々は、世界の人々が化学物質の恩恵を享受し、リスクが適切に管理される安全・安心な社会の構築に貢献したいと考えます。この社会の実現に向けてESG活動を通じて、「責任ある化学物質管理」を先導していきます。

Web 責任ある化学物質管理推進の基本方針
https://www.kao.com/jp/innovation/safety-quality/saicm/saicm-policy/

P36 Our ESG Vision and Strategy > 指標と目標

戦略

リスクと機会

リスク

化学物質をライフサイクル全体で適切に管理しない場合、健康、地球、社会への問題を引き起こすことがあり、事業の継続が困難になります。

さらに、欧州の「持続可能な化学物質戦略」(CSS: Chemicals Strategy for Sustainability)で予想される、世界的な社会や化学業界の変化に適切な対応をとらない場合、事業の競争力が低下する恐れがあります。

機会

「責任ある化学物質管理」を推進することで、化学物質の有用性を最大限に引き出し、気候変動や生物多様性損失への対策も含めた持続可能な社会の実現に貢献します。それにより社会的信頼も得て事業の成長が期待できます。

戦略

花王は、化学物質管理をESG戦略における重点課題のひとつとして捉えています。2022年4月にはESGコミッティでの意思決定をSAICM推進活動と事業活動により迅速に反映させるため、その下に化学物質管理ステアリングコミッティを設置しました。

「正道を歩む」を活動の原点とし、責任ある化学物質管理の基本方針のもと、化学物質に関わる国際ルール、各国・地域の法規制、業界団体の自主基準等の本質やその価値観を理解し、以下の3つの活動を中心として化学物質の有用性を最大限に引き出すべく自主的かつ戦略的に取り組み、企業価値向上に努めます。

①環境負荷低減製品・プロセスの開発
・製品ライフサイクル全体で環境負荷を最小化

②管理システム※を活用したリスク評価手法の最適化およびリスク評価・管理強化
・化学物質のリスク評価手法の最適化と、管理効率の向上
・化学物質による事故ゼロの実現と、地域社会の安全確保・安心の醸成

責任ある化学物質管理

※物質情報、安全性情報、法規情報、数量・用途情報等

③有用性・安全性情報、取り組みの開示と継続的対話

・化学物質の有用性と安全性に関する情報をわかりやすく開示

・社会から信頼される企業になるためのコミュニケーション

社会的インパクト

化学物質管理は、資源枯渇、気候変動、生物多様性損失、水不足、大気・水質汚染、プラスチック問題、ごみ問題、誤情報・偽情報発信等、さまざまな社会・環境課題と深く関わっています。方針と戦略に基づき、産官学との連携を一層強め、リスク評価を含む化学物質管理の取り組みを社会と共有・協働していくことで、人々の安全・安心の確保や、環境を含むさまざまな社会課題の解決に貢献していきます。

貢献するSDGs

事業インパクト

原材料調達から廃棄・リサイクルまで環境負荷を最小化した製品を市場に投入し続けることで、持続的な事業の成長につながります。

生活者、顧客、社員、流通、行政等、幅広いステークホルダーへの化学物質情報の開示とそれを利用したコミュニケーションの充実により、化学物質とその含有製品の理解が深まり、適正な取り扱い方法の普及が進みます。その結果、社会の安全・安心確保に加えて信頼の醸成が期待され、事業の成長につながります。

責任ある化学物質管理 GRI3-3, 404-2

ガバナンス

体制

2022年からは、ESGコミッティ傘下の化学物質管理ステアリングコミッティで策定する大きな方針のもと、SAICM推進委員会が中心となり、製品ライフサイクルを通じての自主的な化学物質管理を推進しています。

当委員会は執行役員が委員長を務め、推進委員は主要な部門から選出されており、提案された取り組みは各部門の日々の業務に反映されています。決議事項はESGコミッティ、経営会議、執行役員会のいずれかの場において、化学物質管理ステアリングコミッティを通じて年1回以上報告し、意思決定の確実なプロセスを維持しています。

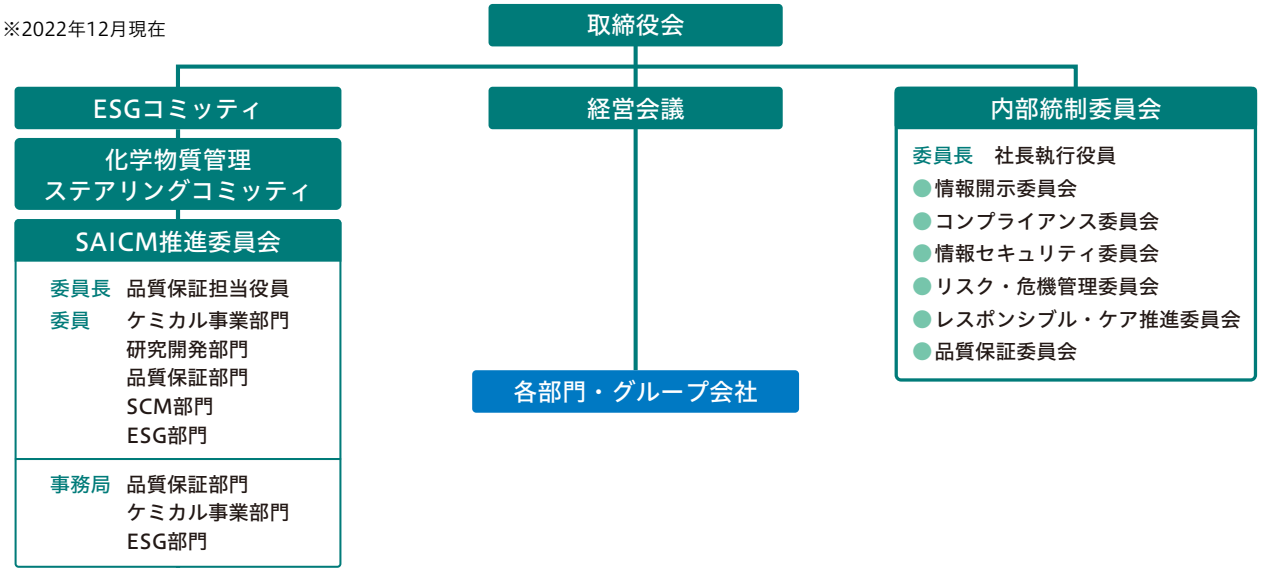
この委員会では活動を推進する5つのチーム※を設置して戦略的な活動を推進しています。各チームのミーティングに加え、年に4回開催されるSAICM推進委員会では、計画、進捗報告、見直しのほか、新規課題への提案・議論や外部有識者を招いた講演会も開催しています。

2022年1月には、社外の視点を反映させるため花王SAICM有識者懇談会を新設しました。SAICM推進委員長および社外有識者で構成され、「責任ある化学物質管理」の考え方や方法へのご指摘・助言をいただくことで活動の真価を追求し続けています。

※ 環境負荷最小化、リスク評価最適化、事故ゼロと地域社会の安全・安心、有用性・安全性情報開示、信頼性コミュニケーション

責任ある化学物質管理活動推進体制

※2022年12月現在



P18 Our ESG Vision and Strategy > ガバナンス

教育と浸透

化学物質管理の意識を高め、より正しい理解を深めるために、外部有識者の講演を含む社員向け教育を継続的に行っています。2022年度は以下の取り組みを実施しました。

・化学物質取り扱い関係者への化学品法規説明会
・製造現場での化学物質の危険性・有害性に関する教育
・外部有識者講演会
　・SAICMおよびUNEA5　・ストックホルム+50

ステークホルダーとの協働

生活者を含むステークホルダーが、化学物質をより適切に使用し、安全で安心して暮らすためには、相互理解が不可欠です。私たちは、化学物質のリスクに関する情報をステークホルダーと共有し相互理解すること（リスクコミュニケーション）で、お互いの信頼と安心を育てられるよう、継続的に取り組んでいます。

また、化学物質管理に関連する学会などの専門家とも協働しています。

生活者との連携/コミュニケーション

製品を安全に安心してお使いいただくため、化学物

責任ある化学物質管理 GRI3-3, 404-2

質のリスクに関する情報についてコミュニケーションを継続しています。

顧客・代理店との連携

川上から川下まで、事業者が国内外の化学物質規制に準拠しつつ、化学物質を適切に取り扱えるように、サプライチェーンを通してさまざまな情報が伝達されています。花王も顧客や販売代理店と協力して、効率的な情報伝達や管理に取り組んでいます。

行政との連携

化学物質に関わる規制当局の信頼を深め、化学物質を取り扱う企業としてより適正な化学物質管理を推進するため、国内外行政との対話と連携を継続しています。

産業界との連携

産業界の化学物質管理の取り組みに貢献するため、さまざまな活動に参加しています。

リスク管理

世界的に化学物質を取り巻く科学・規制・社会のそれぞれの分野で起こっているもしくは起こりうる課題を把握し、SAICM推進委員会が中心となり、リスクと機会を整理した上で、重要事項に優先的に取り組んでいます。例えば、化学物質を取り扱う現場では事故ゼロをめざしPDCAサイクルを継続的に回しています。

これらの活動は、定期的に化学物質管理ステアリングコミッティを通じてESGコミッティに報告しています。

P33 Our ESG Vision and Strategy > リスク管理

目標と指標

中長期目標と2022年実績

中長期目標

私たちは2030年長期目標の中間点として、グローバルで存在価値ある企業“Kao”を実現する中期経営計画K25を策定しました。その筆頭の「持続的社会に欠かせない企業になる」においては、地球環境問題解決への取り組みは不可欠です。「正道を歩む」を活動の原点と考え、「責任ある化学物質管理」の実現を通じて持続可能なかたちで事業活動を発展させるため、2030年までに達成すべき目標を以下に定めました。

①環境負荷低減製品・プロセスの開発

原材料調達から開発、製造、販売、使用、廃棄・リサイクルまで製品ライフサイクルの全段階において化学物質に係る環境負荷を最小化するモノづくりを社会に提案し、社会と協働してその実行を促進し、持続可能な社会の実現に貢献します。

②管理システムを活用したリスク評価手法の最適化およびリスク評価・管理強化

最適な化学物質のリスク評価手法を開発し、管理システムを駆使して、実際のリスク評価と管理強化を促進します。工場では事故ゼロを実現し、地域社会の安全確保・安心の醸成をめざします。また、リスク評価手法最適化研究の成果と評価結果を社会と共有し、化学物質のリスクが社会全体で適切かつ効率的に管理されることに貢献します。

③有用性・安全性情報、取り組みの開示と継続的対話

化学物質情報と花王の具体的取り組みの情報を正確にわかりやすく発信し、ステークホルダーと継続的なコミュニケーションを行うことで、化学物質に関する社会の信頼・安心を醸成します。

こうしたアプローチに対し、指標を策定し、2020年より公表しています。

〈指標1〉安心して使い続けられる製品・原料の有用性と安全性情報の公開率（目標 100%（2030年））

人や環境への影響や、花王の企業活動における重要性などを考慮して公開する化学物質を選定しています。

責任ある化学物質管理

〈指標2〉事業拠点において、原材料調達から廃棄までを考慮し、健康・環境・安全への影響を管理できた比率（目標 100%（毎年））

管理の要件は社会・環境の変化と共に変動します。その都度、現実的に利用可能な最良の方法で影響の最小化に努めています。

P36 Our ESG Vision and Strategy > 指標と目標

2022年実績

2022年の計画に沿って活動しました。製品・プロセスの開発、安全性評価、現場のリスク管理を通じて化学物質によるリスクを最小化し、情報開示・対話を通じて化学物質に対する社会の信頼と安心につなげる取り組みを継続しています。

①環境負荷低減製品・プロセスの開発

・サステナブル原料の利用向上とLC-CO_2削減、節水、廃棄物削減に貢献する製品を開発。

・環境負荷低減製品・プロセス開発の進捗を測る評価軸の検討継続。

②管理システムを活用した、リスク評価手法の最適化およびリスク評価・管理強化

・花王優先評価物質の評価実施（2カテゴリー）。

・動物を使わない安全性評価技術に関する学会・論文発表を実施（日本毒性学会、日本動物実験代替法学会など）。

・ポスト2020生物多様性枠組み策定とTNFD※1運用に先駆け、化学物質管理が生物多様性におよぼすリスクと機会を把握※2。

・花王の工場で化学物質のリスク管理を強化するため、化学物質に関連した環境安全情報を一元管理するシステム構築を継続。

※1 TNFD：Taskforce on Nature-related Financial Disclosures（自然関連財務情報開示タスクフォース）

※2 花王生物多様性の基本方針
https://www.kao.com/content/dam/sites/kao/www-kao-com/jp/ja/corporate/sustainability/pdf/biodiversity-basic-policy.pdf

〈指標〉事業拠点において、原材料調達から廃棄までを考慮し、健康・環境・安全への影響を管理できた比率

事業拠点において、原材料調達から廃棄までを考慮し、健康・環境・安全への影響の管理（GHS表示、SDS更新、リスクアセスメント）を継続し、花王工場98%達成。

③有用性・安全性情報、取り組みの開示と継続的対話

・学校の先生等に化学物質のリスクや有用性をより正しくご理解いただくため、動画の作成に着手。

・薬学部の学生を対象とした化学物質のリスクコミュニケーションを継続。

・化学物質の有用性をわかりやすく伝えるため、内容や言葉の定義を整理。

・生活者の思いとその背景を起点とした、化学物質への疑問や不安を解消するためのコンテンツの改良、対話手段を検討。

〈指標〉安心して使い続けられる製品・原料の有用性と安全性情報の公開率

2020年に評価を行った花王優先評価物質の安全性要約書3件（2030年までの目標に対し公開率 29%）、ケミカル製品のGPS 安全性要約書26件を開示。

Web 3カテゴリ：ジアルキル第四級アンモニウム塩、スルホコハク酸エステル、ペンタエリスリトールモノステアレート
https://chemical.kao.com/jp/sustainability/saicm/article_05/

化学物質に関する取り組みで日本化学工業協会の「JIPS賞」を6年連続で受賞
https://www.nikkakyo.org/basic/page/JIPS_award.html

・社会的に関心が高い成分に関する方針および香料成分名を開示

P65 より安全でより健康な製品

P173 徹底した透明性

以上の取り組みにおいては、化学物質総合管理システムを応用・展開し、安全性評価、数量管理、法規や社会的関心の高い物質等の情報の管理と開示に努めました。

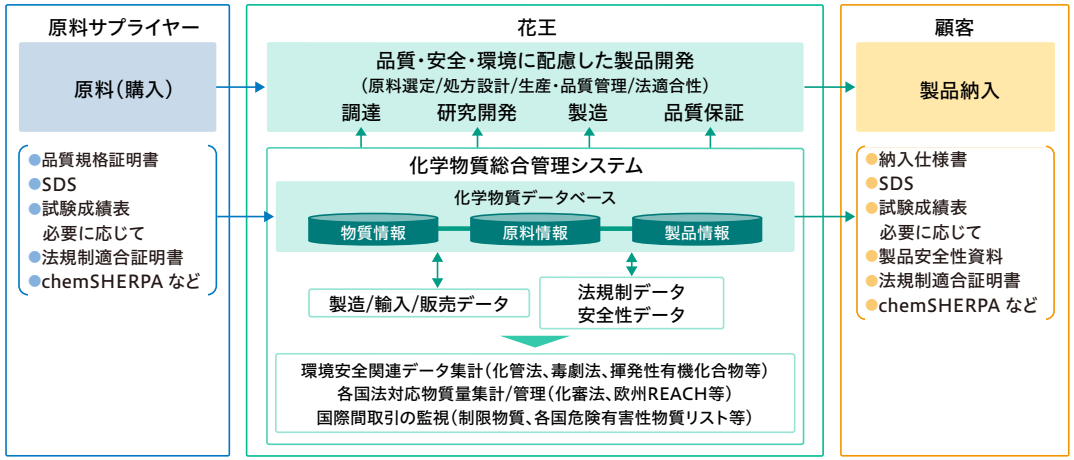
責任ある化学物質管理

化学物質の適正な管理を目的に、化学物質総合管理システムを運用しています。

このシステムでは、原料や製品および含有する化学物質の情報をデータベース化し、安全性や法規制情報の管理を行っています。また、原料に問題が発生した場合は、影響範囲を迅速に特定し、適切な対応ができるようにトレーサビリティの確保に活用しています。

世界的な化学物質関連法規制の動向や事業環境の変化に対応したシステム環境の整備と機能強化を継続します。

化学物質総合管理システム



2022年実績に対する考察

2030年中長期目標実現に向けて、2つの指標を含む2022年の計画を確実に実行しました。特に、EU CSSに基づく規制改革は、世界的な影響が予想されることから、適切な規制となるように国内外の業界団体および行政との対話や、パブリックコンサルテーションへの対応等を実施し、花王への事業影響を最小化することに努めました。

それぞれの活動を融合させ、かつ社会との連携を通じて、包括的に課題解決に取り組み、持続可能な社会の実現に貢献していきます。

責任ある化学物質管理 GRI413-1

主な取り組み

化学物質に関してさまざまなステークホルダーと、以下のようなコミュニケーションに、継続的に取り組みました。

生活者との連携/コミュニケーション

・大学の講座と協働

武蔵野大学薬学部の講座「化粧品産業論」に協力

Web 武蔵野大学 薬学科 カリキュラム
https://www.musashino-u.ac.jp/academics/faculty/pharmacy/pharmaceutical_sciences/curriculum.html

・地域住民とのコミュニケーション

工場周辺の皆さまに安心して暮らしていただくため、国内工場では工場サイトレポートを通じて、工場で取り扱う化学物質に関する取り組みを継続的に発信しました。

顧客・代理店との連携

製品含有化学物質情報の提供

自社の工業製品が含有する化学物質の規制情報等の提供にあたっては、業界共通の情報伝達書式「chemSHERPA※1」を活用して、サプライチェーン上での効率的な伝達を継続しました。

また、急増している顧客からの化学物質規制に関する問い合わせについても、自社独自の化学物質総合管理システムから、製品毎に必要なさまざまな情報を自動収集・帳票化するしくみを開発し、効率的かつ速やかに回答しています。花王の海外関係会社にもこれらのしくみの展開を進めました。

※1 chemSHERPA
製品に含有される化学物質を適正に管理し、拡大する法規制に継続的に対応するためのサプライチェーン全体で利用可能な情報伝達共通スキーム。

SDS※2および製品ラベルのGHS対応

工業用製品が現地の法令に基づき適正に使用されるように、各国・地域のGHSルールに対応したSDSや製品ラベルの作成や改訂を進めました。

特に国内においては、2019年のJIS改正に対応したSDSやラベルの改訂を猶予期限の2022年5月までに完了しました。

※2 SDS
Safety Data Sheet
化学製品を安全かつ適切に取り扱うために、製品に含まれる物質名、危険有害性情報、取り扱い上の注意などに関する情報を記載した書類。

専用ネットワークによる情報提供・情報交換

工業用製品の販売代理店との専用ネットワークを活用して、オンラインでSDSやchemSHERPA-CI※3などの情報を提供し、サプライチェーン上での化学物質管理の推進を継続しました。また主要な販売代理店に対しては、個別に総合安全管理に関する情報交換会を毎年12月にオンラインで実施しています。最新の法規制動向について説明を行うと共に、花王の化学物質管理の取り組みについて、理解と協力をお願いしました。

※3 chemSHERPA-CI
特定の化学物質情報を伝達するための化学品データ作成支援ツールおよびその帳票。

行政との連携

化学物質に関わる規制当局の信頼を深め、化学物質を取り扱う企業としてより適正な化学物質管理を推進するため、行政機関等と4回の情報交換を行いました。

テーマ:ポストSAICM、レギュラトリーサイエンス、情報基盤整備、欧州の持続可能な化学物質戦略(EU Chemicals Strategy for Sustainability; EU CSS)

産業界との連携

EU CSSに基づき、2022年にREACH規則、CLP規則、化粧品規則および洗剤規則の改正に向けた各種パブリックコンサルテーションが行われました。私たちは、将来の事業への影響を最小化すべく、情報収集に努めると共に、より適切な規制となるように主要な役割を務める業界団体を通して、行政とのコミュニケーションを行いました。

このほか、2021年、日本リスク学会よりSAICM推進に係る産官学ステークホルダーに対してグッドプラクティス賞が与えられたことを踏まえ、その代表者であ

責任ある化学物質管理 GRI413-1

る北野大氏と花王が共著で、論文発表を行い化学物質管理の価値伝承と社会からの信頼醸成に努めました。

Web 日本リスク学会
リスク学研究2022年31巻3号
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjra/31/3/31_SRA-0390/_article/-char/ja

グッドプラクティス賞（SAICM社会実装）
https://www.sra-japan.jp/cms/srajaward2021/

2030年中長期目標の実現に向けたチャレンジ（SAICM推進委員会）

また、社内外のエンゲージメントを高め、2030年めざす姿を早期に実現するため、SAICM推進委員会では、2030年のありたい姿を設定しました。高い志を持ち、大きな挑戦に果敢に取り組んでいきます。

めざす姿

私たちは、世界の人々が化学物質の恩恵を享受し、リスクが適切に管理される安全・安心な社会の構築に貢献したいと考えます。この社会の実現に向けて、花王はESG活動を通じて「責任ある化学物質管理」を先導していきます。

ありたい姿

a. Kao製品の有用性・安全性情報をいつでもだれでも容易に入手できるしくみが、実現できている
b. Kaoの発信情報がサイエンスコンテンツとして活用され、子どもたちの化学の学びに貢献している
c. Kaoの開発した評価技術や安全管理手法が世界中で活用されている
d. Kaoが化学物質管理のリーダーとなり、国際目標策定・実現のレギュラーメンバーに選出されている

P201 人財開発＞主な取り組み＞挑戦推奨する組織風土の醸成＞OKRの活用

責任ある化学物質管理

ステークホルダー・エンゲージメント

松下 和夫 氏
京都大学名誉教授

2022年はスウェーデンのストックホルムで最初の国連人間環境会議が開催されてから50年、ブラジルのリオデジャネイロで地球サミットが開催されてから30年の節目となる年でした。一方、国連では、気候変動、生物多様性の損失、汚染（化学物質・廃棄物管理）、を地球の三重の脅威として警告しています。こうしたことから、気候変動と生物多様性損失への対策をも包摂した「責任ある化学物質管理」が一層求められています。

花王では世界の人々が化学物質の恩恵を享受し、リスクが適切に管理される安全・安心な社会の構築をめざし、ESG活動を通じて「責任ある化学物質管理」を先導しています。そのアプローチは、①環境負荷の最小化、②事故ゼロの実現、③リスク評価手法の最適化、④化学物質の有用性と安全性に関する情報のわかりやすい開示、⑤社会から信頼される企業になるためのコミュニケーション、となっています。

その際の基本的姿勢として、「正道を歩む」を活動の原点とし、①化学物質に対して謙虚な姿勢を忘れず安全を追究する、②責任ある化学物質管理活動のブランド化に向け情報開示と共有を行う、③社会との対話を積極的に行い生活者の行動変容につなげる、ことをめざしていることは高く評価できます。

現実に、環境負荷最小化に向けては、ライフサイクルでのCO_2削減目標と進捗管理の共有化に向けた指標を設定し、見える化を進めようとしていること、リスク評価手法の最適化の面では、安全性評価結果の公開に関し、「JIPS賞」を6年連続で受賞したことや学会賞を多数受賞していることなどからも優れた成果を上げているといえます。

また、情報開示と信頼性向上へのコミュニケーションでは、透明性と信頼性を得るための双方向のコミュニケーション内容の検討が進められ、一般生活者向けのナラティブストーリーを複数作成するなど新たな取り組みを行っており、科学的根拠のある情報を適切に発信すると共に、その信頼性向上と行動変容への効果の検証に向けた成果が期待されます。

今後引き続き国際ルールの進展状況や各国・地域の法規制の動向、そして業界団体の自主基準等の本質やその価値観を理解しつつ、社会から信頼されるフロントランナーとしてのコミュニケーションを進めることを期待するものです。